

独りぼっちのミミツキュ

アンコール・スワットル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

20年ほど前に流行ったピカチュウグッズを参考にして生まれたポケモン。

ばけのかわポケモン。そしてゴースト・フェアリータイプ。

彼はどうしてピカチュウに模造しているのか、その謎を迫っていきます。

コロコロコミックに載っていたミミッキュが可愛すぎて辛抱たまらないので書いてみました。

原作となるゲームがまだ発売していないので、全て妄想です。

目次

独りぼっちのミミツキユ

ここはシオンタウン、ポケモンタワー。

亡くなったポケモンの魂が安らぐ地であり、ガス状のポケモンや頭蓋を被ったポケモンが生息している。

「キュツキユー！」

ゴースに似た黒いポケモンがそこに居た。尻尾を手のように動かし、食べ物を探するときにはゴムのように伸び縮みをしながら散策をした。

「ミミー… ミミー！」

尻尾をぶんぶんと振り、ゴースやゴーストの群れに挨拶をした。

「ゴツゴツ!!」

「ゴースースー!!」

ゴーストは手をひらひらと振り、ゴースはスモッグをこちらに撒き散らしている。

「ミツミツ！ ミツミツ！」

呼吸をしない身体にも関わらず、反射的にむせてしまった。

煙が晴れた時には、もうゴースたちの姿は遠くへと消えていた。

「ミー……」

しなれたように尻尾を垂らし、とぼとぼと巢へと帰ることにした。

これは今に始まったことではない。毎日、毎日ゴースたちに話しかけようと試みるも、邪険にされてしまう。

自分は少し姿が違うだけで、同じゴースなのに。どうして邪魔者扱いをされるのか、分からなかった。

それでも、毎日続けていれば何時かは仲良くなれるだろう。そう信じ続けて悠久の時を彷徨い続けている。

人の足音に反応し、視線を向けると一人の少年とポケモンが駆け足で進んでいた。

「ピカチュウー！ 早くゴーストポケモンをゲットしてナツメにぎやふんと言わせないとな！」

「ピツカア！」

どうやらポケモンの名前はピカチュウと言うそうだ。久し振りの来客が気になり、影から後を付けてみることにした。

「ピィ？」

ピカチュウが突然立ち止まり、こちらを振り向いた。慌てずゆつくりと顔を隠す。

「どうした？ ピカチュウ！」

「チュウ！」

トレーナーはピカチュウに声をかけるも、ピカチュウは何事もなかったかのように先の方向に駆け出した。

トレーナーも気にすること無く、走り出した。

道中、ゴースたちと出会い、自分では仲良くなれなかった彼らと楽しそうに接している。

一匹のゴーストが、トレーナーと共にポケモンタワーを後にした。

「ミツキュツ！」

自分もピカチュウのようにポケモントレーナーと仲良くなりたい。焦る気持ちを抑えきれず、ポケモンタワーを飛び出した。

尻尾をぶんぶん動かしながら、きよろきよろと辺りを見渡した。

「キュウー……」

しかしトレーナーを見つけられず、しおれた尻尾は往く宛もなく地面をぺちぺちと叩いている。



——あれから19年が経過した。

「ミィィィ……」

とてて、と駆け寄ると薄汚れたぬいぐるみが大きな木の下に捨てられていた。

「ミィー」

あの頃出会ったピカチュウを思い出し、ピカチュウがトレーナーに見せた笑顔が脳裏に浮かんだ。

自分もピカチュウに憧れ、様々な地を旅して回った。だがトレー

ナーに捕まえられることはなく、今も野生として独りぼっちのまま
だ。

尻尾を使い、器用にぬいぐるみから綿を取っていく。空洞になった
ぬいぐるみを、ワンピースのように上から被ってみる。

「ミミミミッ……」

突如世界が闇に覆われ、たたらを踏んでしまった。

「ミッ！ キュッ！」

お腹の辺りに目だし穴を開け、再び被ってみる。

「ミツミッ！ ミツミッ！」

尻尾を揺らしながら、ぴよんぴよんと跳びはねている。

「ミッ！」

枝に引っかかり、ぬいぐるみの尻尾が外れてしまった。もつとも、
元からくたびれていたので、引っ掛からずとも何時かは外れてしまっ
ただろう。

「ミィー」

しよぼくれたように耳を後ろに倒し——ぬいぐるみなので最初か
ら倒れているが——行く宛を無くしたぬいぐるみの尻尾を悲しげに
見つめていた。

暫くすると、なにかを探し始めた。

「ミミミッ！」

稲妻の如く雄々しく曲がった枝を発見し、空いた足で掴んでみた。
本物の尻尾みたいにパタパタと動かし、納得の笑みを浮かべた。

「ミキユ？」

ふと視線を向けると、ピカチュウのコロニーを発見した。ピカチュ
ウのぬいぐるみを被った自分を想像し、とてちとてちとと早足で向
かっていく。

「ピカア？」

「ピ！」

「チューチュー!!」

「ピカピカ!!」

旗から見ると薄汚れた気味の悪いピカチュウ。群れは三々五々に

い間野生として過ごしてきた自分ではいまいち実感が持てない。

「おーい！ ピカチュウ!!」

「ピカピ!!」

どうやらトレーナーが呼びかけているようだ。

「キュ?」

「チュウ!」

またね、と元気よく話しかけるピカチュウ。

羨ましい。もし……もし、自分がこのピカチュウになれば、どれだけ日常が豊かで幸せになれるだろうか。

このピカチュウさえ居なければ……もし、このピカチュウに自分が成れたら、どれだけ楽しいのだろうか。

身体から黒いなが溢れ出ている気がした。

「ピカピカ!」

怖がられたのか、ピカチュウは走り去ってしまった。

そうだ、それでいい。このままピカチュウと一緒にいては、自分が自分で保てなくなってしまう。

「ピツカア!」

「おい！ 大丈夫か!!」

どうやら、自分を病気か何かかと勘違いしたピカチュウがトレーナーを連れてきたようだ。

ああ……自分はなんて愚かな考えを抱いてしまったのだろうか。ピカチュウとトレーナーの姿を見ると、自分なんて入る余地が無いことに気がついた。

トレーナーと一緒に居る時のピカチュウは非情に嬉しそうで、自分はこの笑顔を壊そうとしたのかと、恥ずかしさと後ろめたさで胸が締め付けられる思いがした。

「キュッキュ! ミミッキュ!」

顔を上げ、元気よく尻尾——木の棒だが——を振り大丈夫なことを主張した。

「お！ 元気そうじゃないか!」

「ピカピカ！」

「ピカチュウと遊んでくれてありがとうな！」

トレーナーは自分の頭をポンポンと叩き、手を振りながら戻っていった。

「チュウ！」

ピカチュウはパタパタと尻尾を振り、また会おうと全身で伝えている。

「ミツキュ！」

楽しい時間も何時かは終わってしまう。ピカチュウとの時間は短くも、非情に有意義で、今も胸の中がほかほかとしている。

「キュウ」

気がつくと、このぬいぐるみを見つけた大木の前に来ていた。

そう言えば、自分もかつてはトレーナーと一緒に過ごしたっけな。だけど自分は病弱で、道半ばで尽きてしまった。

「キュ？」

あれ？ それは何時の出来事だろう。自分は産まれてからずっと、野生として独りぼっちで生きてきた。

それなのに、どうしてトレーナーとの思い出が胸いっぱい広がってくるのだろう。

どうしてこんなにも、悲しくなるのだろう。

人間の足音が近づいてくる。

どこか……心が安らぐ、そんな足音だ。

「キュウ？」

誰？ そんな思いを籠めて人間——老婆に話しかけた。

老婆は目を見開き、信じられないと……驚いた表情で自分を見つめている。

かつてパートナーだったポケモンが、毎日のように抱きかかえていたぬいぐるみだ。

「おかえりなさい。ミミツキュ」

かつて呼ばれていた、自分の名前^{ニックネーム}を慈悲のある声で囁き、老婆はそ

の場にしゃがみ込んだ。

日本語で「ミミツキュ」と書かれたモンスターボールを両手で持ち、自分と視線の高さを合わせて優しく微笑んでいる。

「キュー・キュー！」

ぴよんぴよんと飛び跳ね、老婆の胸に飛び乗った。

「ミミツキュー！」

——ただいま！